

2024. 9. 15 (日) 使徒18:23~28

18:23 パウロはアンティオキアにしばらく滞在した後、また出発し、ガラテヤの地方やフリュギアを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた。

18:24 さて、アレクサンドリア生まれでアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。

18:25 この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。

18:26 彼は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いたプリスキラとアキラは、彼をわきに呼んで、神の道をもっと正確に説明した。

18:27 アポロはアカイアに渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、彼を歓迎してくれるようにと、弟子たちに手紙を書いた。彼はそこに着くと、恵みによって信者になっていた人たちを、大いに助けた。

18:28 聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破したからである。

<説教>

使徒パウロはコリントに〈一年六ヶ月の間腰を据え〉(18:11)、〈なおしばらく滞在〉(同18)してイエス・キリストの福音を宣べ伝えました。その後、プリスキラとアキラ夫妻も一緒に〈シリアに向けて船で出発し〉(18)でエペソに着きました(19)。エペソの〈会堂に入ってユダヤ人たちと論じ合った〉(19)後、人々から〈もっと長くどまるように頼〉まれましたが、〈パウロは聞き入れず〉(20)、「神のみこころなら…」とエペソから船出し(21)ました。〈それからカイサリアに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンティオキアに下って行〉きました(22)。こうして第2回伝道旅行が終わりました。

〈パウロはアンティオキアにしばらく滞在した後、また出発し〉(23)、第3回伝道旅行が始まりました。彼は〈ガラテヤの地方やフリュギアを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけ〉ました(23)。2回目の伝道旅行中に〈アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った〉(16:6)ことがありましたが、その地域とある程度重なっているようです。先の伝道旅行も〈「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか」〉(15:36)ということから始まりました。そのように、福音を聞いて主イエス・キリストを信じた弟子たち、兄弟たちのその後の歩みについてパウロは気にかけていたのでしょう。彼らの信仰が神のみこころにかなって成長するように、教会が健全に建てあげられて行くように、福音の真理から逸れてしまうことのないように、常に心配りをし、彼らを〈力づけ〉ることも自分が主から委託されたことだと弁えていたのです。

さて、パウロがそのような働いているとき、〈アレクサンドリア生まれでアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来〉ました(24)。アレクサンドリアは、〈ガラテヤの地方やフリュギア〉また〈エペソ〉といった「アジア」とは地中海を挟んで南のエジプトの地中海沿岸の都市でした。当時、アテネそしてパウロの出身地タルソと並ぶ世界の三大学問都市とされていました。そこには多くのユダヤ人がいて、会堂も多くあり、紀元前3世

紀頃にはギリシア語訳旧約聖書（七十人訳）が作られていました（新約聖書の中の旧約聖書引用はこの七十人訳によっています）。彼は〈雄弁（この言葉も元来は「学識、教養がある」という意味だそうです）〉だけでなく〈聖書に通じて〉いました(24)。

そんな〈アレクサンドリア生まれ〉の〈ユダヤ人〉のアポロが、いつ、どのように〈主の道について教えを受け〉(25)たのかは分かりません。しかし彼は〈霊に燃え〉(25)てもいました。彼は雄弁に〈イエスのことを正確に語ったり教えたり〉することができました(25)。〈正確に〉とは「詳しく(マタイ 2:8)、綿密に(ルカ 1:3)、細かく(エペソ 5:15)」ということです。旧約聖書に約束されていたメシヤ(キリスト)とはナザレのイエスのことだということを〈正確に語ったり教えたり〉できたのですから、何の問題もない、ほとんど完璧です。しかし、一点だけ「欠け」がありました。それは〈ヨハネのバプテスマしか知らなかった〉ことでした(25)。〈ヨハネのバプテスマしか知らなかった〉とはどういうことだったのか。この後、アポロがエペソを去った後、エペソに来たパウロが会う〈何人かの弟子たち〉(19:1)のことが出てきます。それは〈聖霊がおられるのかどうか、聞いたこと〉がなく、〈ヨハネのバプテスマ〉を受けただけの弟子たちでした(19:2-3)。おそらく彼らはこの〈ヨハネのバプテスマしか知らなかった〉ときのアポロの話しを聞き、教えを受けた人々だったのでしょう。そのときのアポロは「主イエスの名によるバプテスマ」(19:5)は知らなかった。約束のキリストである〈イエスを信じるように人々に告げ〉るヨハネによる〈悔い改めのバプテスマ〉(19:4)しか知らなかったのでしょうか。また、「ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを受けられる」とのイエスのみことば(1:5)のことは知らなかったのかもしれませんが。更に「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」というペテロの言葉(2:38)のことも知らなかったのかもしれませんが。

〈会堂で大胆に語り始めた〉そんなアポロの話しを〈聞いたプリスキラとアクィラは、彼をわきに呼んで、神の道をもっと正確に説明した〉のです(26)。アポロが〈正確に〉語った〈主の道〉、〈神の道〉を、〈もっと正確に〉語って〈説明〉しました。〈わきに呼んで〉とは会堂の会衆の面前ではなく、自分たちの家に個人的に招いてということです。二人はコリントに始まってエペソまで一緒にいたパウロから〈主の道〉〈神の道〉について〈正確に〉教えを受けて来ました。それをアポロに〈もっと正確に説明〉しました。パウロは人々の願いを聞き入れず、〈神のみこころ〉を理由にエペソを去りました。その後まるで入れ替わりのようにアポロがエペソに現れたことをまず〈神のみこころ〉と二人は考えたのでしょうか。だからこそ、アポロの話しを素直に受け入れつつ、「正確さに欠ける」点について、助言するべきだと考えました。彼がより〈神のみこころ〉にかなう福音宣教者になるよう協力することも自分たちに対する〈神のみこころ〉だと考えたに違いありません。

〈アレクサンドリア生まれ〉で〈雄弁〉かつ〈聖書に通じていた〉アポロも怒ったりせず謙遜に二人の説明を受け入れ、〈主の道〉〈神の道〉〈イエス〉のことを〈もっと正確に〉知るようになりました。もちろん「はたしてそのとおりかどうか、聖書を調べる」ことも共にしたことでしょう。

そのようにしてエペソで更に良い働きをしようかというアポロでしたが、〈アカイアに渡りたいと思〉うようになりました(27)。具体的には〈アカイア〉の〈コリント〉(19:1)

でした。それでプリスキラ夫妻を始めエペソの〈兄弟たちは彼を励まし、彼を歓迎してくれるようにと、弟子たちに手紙を書〉きました。せつかくエペソに良い働き手が与えられたと思ったのに、とがっかりしたかもしれませんが、それもまた〈神のみこころ〉と受け取ったのでしょう。アポロを励まし、コリントの教会へ喜んで送り出しました。

そのようにしてエペソに来たときより〈イエスのことを〉〈もっと正確に〉教えられ、福音宣教者として成長したアポロがコリントに着きました。そこで〈聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破し〉(28)ました。そうやって彼は〈恵みによって信者になっていた人々〉つまりコリントの教会を〈大いに助けた〉(27)のです。アポロがエペソに来たこと、そこに既にパウロから正確にイエスのことを学んでいたプリスキラ夫妻がいたこと、二人を通してもっと正確にイエスについて学ぶことができたこと、これらはアポロにとって〈神のみこころ〉であり、神の〈恵みによって〉〈大いに助け〉られたことでした。

私たちも〈神のみこころ〉により、神の〈恵みによって〉、〈イエスのことを〉〈もっと正確に〉〈語ったり教えたりし〉、もっと〈聖書によってイエスがキリストであることを証明〉する教会になりたいと願います。神の大いなる助け導き、恵みを祈り求めます。